

令和7年度 宮崎公立大学 学校推薦型選抜Ⅰ 小論文課題

次の文章を読み、近年の伝統行事における変化と課題を整理した上で、今後地域の伝統行事がどうあるべきか、あなたの意見を600字程度で述べなさい。

神男（しんおとこ）に触れようと、裸男（はだかおとこ）たちが「もみ合い」を繰り広げる奇祭「はだか祭」。愛知県稲沢市の尾張大国霊（おおくにたま）神社で毎年2月にある祭りに、初めて女性が参加する見通しとなった。「ただし、もみ合いに女性が参加するというわけではありません」と禰宜（ねぎ）（注）の片山貢さん（60）。参加するのはその前に行われる「笹（ささ）の奉納」だ。

祭りに女性が参加することを禁止する決まりはないが、「裸での参加」という慣習のため、事実上、これまで女性は参加できなかった。

変化を引き起こしたのがコロナ禍だった。2020年から裸でのもみ合いが見送られたが、21年と22年は「着衣のまま、密にならない人数」という条件で笹の奉納を実施。それならば、と女性たちが参加した。

こうした実績もあり、地元の女性団体から正式に参加の申し出があった。今月22日の祭りには複数に参加予定で、そのうちの一つの「縁友会」の鈴木彩加副会長（36）は「父親が参加している姿を見たとき、『男性だったら出られたのに』と思ったことを覚えている。ようやく願いがかなったという気持ち」と喜ぶ。

女性参加が進む一方で、見えない壁は残る。

山や鉾（ほこ）が京都の街を巡る祇園祭は男性が祭りの中心を担う。ただ、各山鉾が事前に届け出て男性と同じ法被や浴衣を着れば、女性もお囃子（はやし）をする「囃子方」として参加できる仕組みはある。

祇園祭山鉾連合会は01年に「届け出制」を始めた。以前は女性の囃子方を乗せて巡行する山鉾は複数あったが、囃子方がいる14基の山鉾のうち、女性が参加しているのは1基。連合会によると、この1基からしか届け出がないという。佛教学の八木透教授（民俗学）は「届け出制にしたことで各山鉾や連合会としての判断が公になる。かえって高いハードルになっているのでは」とみる。

平安時代に始まった祇園祭だが、室町時代初期までは「女曲舞」という芸能が鉾の上で行われたという記録も残る。女性たちで作る「平成女鉾清音会（さやねかい）」の松嶋美紀代会長は「時代に即して女性男性の性差が縮まっている」として、山鉾巡行への参加実現をめざして活動を続けている。

女人禁制を堅守する祭りにも、変化を求める声上がる。大津市の大津祭（おまつり）は本祭（ほんまつり）以外なら女性が曳山に乗れる日もあるが、本祭は男性だけだ。

ある町会の責任者の男性（70）は女人禁制について「祭りの伝統を守ってきたのは男性だ。議論の余地もない」。一方で40歳の男性責任者は「伝統と進化は紙一重で今の状態では今後100年、続けられない。時間をかけ、変わっていくのでは」と期待する。

後継者不足から、新しい姿に変わりつつある伝統行事もある。約900年の歴史がある尾八重神楽（宮崎県西都市）は男性だけが舞ってきたが、今は女性が加わる。

神社の氏子を神楽の「家元」に選定し舞を継承していく世襲制を取っていた。だが、25軒ほどあった家元が7、8軒まで減り、10年ほど前、世襲制の撤廃を決めた。現在、22人の舞い手のうち4人が女性だ。中武貞夫宮司（86）は「地域ぐるみで文化を守る方向に切り替えた」と話す。

祭りに参加した1千人を対象にしたネット調査（一般社団法人「マツリズム」、2019年）によると、祭りの課題は「担い手が集まらない・人が足りない」が最多の38%で、「主となる運営側が高齢のため、体力的に厳しい」が28%と続いた。

出典：「「男性中心」変わる祭り」朝日新聞 2024年2月21日朝刊より抜粋

（注） 禰宜（ねぎ） 神社における神職の一つ。